



# 変わるもの 変えられるもの

寺西澄子 / てらにし・すみこ  
日本国際ボランティアセンター職員

## 戦

後70年だというので、キリのいいところで20年前の空気を思い返していた。あくまで個人的な体験だけど、初めて日本を出てフィリピンのネグロス島に出かけた年だから、映画、雑貨、料理……どれをとってもアジアが目新しく魅力的に映った。その年に

出た首相談話は、日本が戦争の被害者じゃなくて加害者でもあったことに向き合おうとしているようだった。日本もアジアに対する「上から目線」から脱する時代が来たんだ、英語じゃない言葉で友人を増やせたらおもしろいな、と無邪気に思っていた。

プンしてピッカピカ、市内では北京かと思うくらいたくさんタクシーが行き交っていた。日本でそんな話をしたら、「それって平壤だけ特別でしょ」と言われるのがオチだ。そうかもしれない。けど、あの国は変わるわけない、と思っていないかなあ。

東京にいて週末に買い物に出かけると、日本語よりアジアの言語のほうがたくさん聞こえてくる。人が「往」くだけじゃなくて、「来」てるんだと今更ながらに実感する。でも書店には、中国が脅威だとか韓国

の経済は限界だとか、やっぱり日本は素晴らしいとかいう本があふれている。そして、隣国の脅威にさらされたくない、と自衛しながら、平和国家・日本は今後も変わらない、と言いつつ聞かされて

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

## CONTENTS ■ HALINA 30 2015.11.01

02	Relay Essay ポコポコ <sup>30</sup> 変わるもの 変えられるもの ©寺西澄子
03	【特集】主権回復から13年 東ティモールは今 ©マリアノ・フェレイラ
08	【Topics】『ルック・オブ・サイレンス』が描くインドネシア社会の影 ©岩原紘伊 マウナケアとカブ・アロハ ©西田純子
10	【Column】Kakao Kita カカオ民衆交易奮闘記 <sup>10</sup> 貯蓄プログラム開始! ©津留歴史 マニラ・ジープニー通勤 <sup>6</sup> 大雨の日の帰宅 ©小川二美子 ロクサエの歌が聴こえる <sup>6</sup> DAME IHA TIMOR ©野川未央 美味しいマンガ <sup>6</sup> 『戦争めし』 ©安藤文将
12	わたしの友産友消じまん <sup>6</sup> 祝島ひじきの巻 <sup>6</sup> 星川美穂
13	APLA食堂 <sup>10</sup> エコシュリンプ ©大久保ふみ、廣瀬康代
14	【Voice from APLA partners】【東ティモールより】自分たちが栽培した大豆でテンペ作り
15	事務局だより

表紙のことば  
今から15年前、タイとラオスの国境の町ウボンラチャターで、アジアの農村女性が出会う国際寄り合いが開催された。

APLAの前身、日本ネグロス・キャンペーン委員会時代のことだ。生まれて初めて村を出て外国まで来たという人も多かった。彼女たちは自作の織物を持ち寄り、ライフストーリーを語った。そして織物の交換会が始まった時、参加者の中でほとんど発言をしなかったもの静かなラオスの女性が、私に絹のショールをプレゼントしてくれた。「森の植物から作る染料で糸を染め、家族の世話を終えてようやくひとりになれる時、織機の前に座って頭の中で文様を描く。そんな時間が一番好きです」。やさしい笑顔で語る彼女の声を私たちは初めて聞いた気がした。

このショールを私は15年間、一度も使わず大切にしまっている。「夜中にコツコツ織った」という絹を、私なんその汗で汚して洗濯してしまうなんて、恐れ多くととてもできない。(大橋成子)

## 特集

# 主権回復から13年 東ティモールは今

マリアノ・フェレイラ / Mariano Ferreira  
La'o Hamutuk 農業部門調査員

## 東

ティモールは太平洋地域の小国だ。人口106万6409人(男性54万4198人、女性52万2211人)のうち、75%が農村部に集中し、農業、漁業、家畜からの収入に頼っている。

住民の約8割が自治拡大を拒否し独立を選んだ1999年の住民投票の結果、25年にわたるインドネシアの占領から解放された。その後、国連東ティモール暫定行政機構(UNTEA)による独立に向けた準備が進められ、2002年5月20日、真の主権回復を果たした。

しかし、主権回復から13年経った現在も、東ティモールは様々な課題を抱えている。とりわけ政府

は人びとの暮らしに大きく関わる第一次産業の発展に優先順位を置いておらず、石油依存の経済から抜け出せていない。

## 拡がる都市と農村の格差

歴代政府はこれまでに、大小さまざまなインフラ、農業、教育、保健、社会福祉、観光、その他の公共サービスを通じて「民衆の暮らしを良くすること」を約束してきた。この13年間で、確かに道路、橋、水道、電気などのインフラ整備は格段に進んだ。しかし、そのほとんどは首都デシリに限られたものだ。国の玄関である首都をま

本来であれば、人口の75%が暮らす農村部にこそ、インフラやその他のサポートが必要であるにもかかわらず、それは無視されてきたのだ。

また、政治・経済システムが中央集権的になりすぎている。国家予算の大部分がデシリだけで回っており、地方に流れるお金はほんのわずか。結果、デシリは都市化が急速に進み、若者や働き手は自分の地域を捨て、仕事を求めてデシリに集中する。しかし職種は、公共事業の日雇い労働者、警備員、清掃員、物売りなどに限られ、63万人の全労働人口のうち失業者が41%にものぼるという統計も出されているのが現実だ。

さらに、国内で富裕層とされる人口20%のうち、7割をデシリ住民が占めている一方で、地方に暮らす人びとの半分以上が貧困層に区分される。たかだか人口100万人強の小さな国であるにも関わらず、中央と地方の格差が年々拡大しているのだ。

## 米から塩まで輸入品

東ティモールは、国家収入の85%を石油基金に依存している現状がある。2012年の国家予算は13億米ドル(約1560億円)だが、そのうち農業関係予算は2・3%に止まっている。一方、大規模インフラの予算は35%強となっており、この配分は毎年ほぼ同じだ。こう



農村部ではガスが普及していない。日々の炊事に必要な薪集めは主に女性と子どもの仕事だ。



東ティモール

EUとドイツ国際協力公社(GIZ)は「地域開発プログラム(RDP)」と呼ばれる農業分野の事業を展開している。国連食糧農業機関(FAO)もスペイン政府と協力した農業プロジェクトを展開している。オーストラリア国際開発庁(AID)が財政支援する「Seeds of Life(生命の種)」という種子プロジェクトで使用されるハイブリッド種子は中国から来たものであることは周知の事実だ。

こうした国際機関によって2002年〜2014年までに実施された農村開発や農民の生活改善事業の成果を調べてみると、実際のところ、農業生産や農村の生活が向上したという例はほとんどなかった、と言っても過言ではないだろう。

2014年現在、地方の農民は、灌漑設備もなく、きれいな水にもアクセスできず、生産物には適正な値段がつかず、農業技術も十分ではない状況を生きている。政府や機関による小農民に対する適切な補助やサポートはなく、農産物の生産力は一向上がらない。道路は依然としてひどい状態のまま、農民が生産物を運ぶのに必要な基礎的なインフラすら整備されていないのだ。そうした状況下で、国際機関の支援による多くのプロジェクトは、残念ながら成果がないうまま終了してしまっただけだ。

**農民不在の農村開発**

2008年〜2009年にかけて、政府は農水省を通じて、米とトウモロコシの生産を向上するための莫大な予算を投入して、機械化プログラムを実施した。名づけて

「2011年〜2030年国家開発戦略計画(PEDN)」という。大型トラクター700台、小型トラクター3000台以上が地方にばらまかれ、前述した「Seeds of Life」によるハイブリッド種子と化学肥料・農薬のセットも配布された。

私たちは、このプロジェクトの成果について、2015年の5〜6月に、ボボナロ県マリアナとマヌファヒ県サメで調査を実施した。マリアナでは、ハイブリッド米の栽培は失敗していた。また、配布されたトウモロコシの種子も収穫が悪く、農民たちは相変わらず自分たちの在来種を栽培していた。灌漑施設がまだ整っていないために、農民の生活は依然として厳



公共交通機関がない地方を訪問すると必ず誰か「ティリまで乗せてほしい」となる。

しい。プロジェクトを実施するための基本的データが存在していないのも問題だった。トラクターや種の配給の前に、水田や畑の面積が何ヘクタールあるのか、米とトウモロコシの年間生産量や目標は何トンなのか。したがって、当面はどれくらいの食料輸入が必要なのか。このような基本データをもたないままに政府によるプロジェクトは進められていた。

もうひとつ例をあげよう。商業産業環境省(MCIA)は、農民の生産物が市場にうまく流通することを目的に「民衆が耕し、政府が買う」というプロジェクトを実施した。この結果はスローガンだけにとどまり、実際に農村で地元産品を購入したのは一度だけ。完全に失敗に終わったが、農民はいまも政府が自分たちの生産物を購入してくれるのを待っている。このプログラムに次いで現在は新しく「民衆の店」プログラムが開始され、農民から買いつけた産物を販売する店を村の市場や村落に作った。「民衆の店」は確かに存在しているが、残念ながらそこで売られているのは、輸入品の食用油、インスタントラーメン、ココア

した状況は、食料の輸入を年々強め、インフレを生み出している。輸入依存の結果、国内生産物は太刀打ちできず、国内の経済もさらに低迷するという悪循環を生み出している。

2014年の貿易収支バランスを見てみると、輸入総額は5億2600万ドルに対して、石油・天然ガスを除いた輸出総額は1400万ドル(うち94%がコーヒー)である。こうした輸入依存によって、人びとは、食料をはじめあらゆるものを買わなければならないという消費主義が生み出された。東ティモールでは大家族で生活するのが一般的で、子どもが3人以上いて、さらに小さな兄弟姉妹や親族の子どもも面倒を見るのは珍しいことではない。だから、物価が上がれば、その分家計を圧迫する。

主食のひとつである米については、ベトナムやタイなど東南アジアからの輸入依存度が高い。国内でも米の生産はされているが、輸入米に比べると微々たる生産量であり、価格競争にも勝てないために一般的な市場には流通していない。

首都ディリ市内から地方の市場

そして村のキオス(小さな商店)まで、売られている商品を調べてみると、日用品、米、砂糖、食用油、調味料、インスタントラーメン、ココア、ビール、ビスケットにいたるまで、すべてが輸入品だ。建築資材や電化製品もまたしかりである。

**1日1ドル以下の生活とは?**

国連開発計画(UNDP)の人間開発報告書(2007年)によれば、貧困の定義は二つに分けられる。一つは、多次元貧困と呼ばれ、さまざまな種類の貧困に苦しめられている実態を浮き彫りにするために導入された多次元貧困指数(MPI)という指標を用いる。多次元貧困の10の基準のうち、特に重要とされているのが、(1)教育、(2)健康、(3)生活水準(清潔な水へのアクセス、電気・衛生状況、住居、ゴミ処理・交通手段など)だ。東ティモール保健省のデータによると、56%の子どもたちが栄養失調であると言われており、多次元貧困にある人びとは68%に

及ぶとみられている。

もうひとつの定義は、所得貧困と呼ばれる絶対的貧困状態だ。つまり、1日の平均所得が1ドル以下の人びとを指す。国家統計局のデータによると東ティモールでの貧困状態にある人びとは人口の49%に及ぶという。

この二つの貧困のカテゴリの数字が、東ティモールの状況をよく反映している。ただし、以上はあくまでも国際機関の統計であって、実際は、1日1ドル以下で暮らしている人の数は数字以上に多いと考える。特に地方の農民で、1日1ドル年間365ドル以上の「現金収入」を得ることが出来る人は本当に少ない。ではそうした人びとはどのように生活しているのか。たとえば、海外出稼ぎやディリなど都市部で就労している家族からの仕送りがある家庭はかなり多い。また、農民の場合、現金収入は少なくても、何とか食べられるものは確保できているケースが多いので、貧困層と言っても、飢えに苦しむといったことはほとんど見られない。東ティモールでは、家族・親族間の助け合いが強く残っているため、たとえ貧しくとも

都市部の開発と同時に、この間、多くの国際機関が農業分野のインフラ整備事業も展開してきた。日本の国際協力機構(JICA)は灌漑整備の巨大事業を進めているし、

**巨額な国際援助は農村の生活を変えたか?**

ストリートチルドレンや物乞いなどが見られないのも特徴だ。加えて、地方の場合、大半が持ち家に住んでいることから、住居費の心配がないことも、「1日1ドル以下」で必要最低限の暮らしが保てる理由のひとつであろう。

筆者プロフィール

**マリアノ・フェレイラ** / Mariano Ferreira

1974年ティリ生まれ。インドネシアの国立ジャバラ大学経済経営学部を1999年に卒業後、東ティモールに戻り、学生時代に参加していたRENETIL(東ティモール学生抵抗戦線)のつながりて、1999年4月から人権団体HAKで人道支援プログラムのボランティアとして活動。農村からティリに逃れてきた国内難民への支援物資配給などを担当。99年5月の住民投票のキャンペーンでは戸別訪問を通して独立を訴えた。独立後、HAKの専従スタッフ、2003年にマウベ事務所の責任者になる。10年にわたるHAKでの活動を終えて、2010年、La'o Hamutuk(テトク語で「共に歩む」の意)という開発についてのモニタリングや分析を行うNGOの農業分野グループに加わり、農業分野の調査活動を担当。

東ティモールの暮らしメモ

一人あたりの米消費量は106kg/年(=0.3kg/日)
2015年現在、輸入米は25キロで約15ドル(=1kgで50~75セント)
国産米はほとんど流通していないが、1kgで約1ドル。
一人あたりの魚の消費量は6kg/年
公教育は、小中学校は無料。ただし、制服や教科書代などの経費は自己負担。農民にとっては、決して小さくない支出である。
公立の病院・クリニックは、無料。薬も一般的なものは無料で得られる。
住民税の徴収は現在のところなし。
電気代は、2005年以降、使用量に応じて課金されるようになった。最低(ランプ3~4個のみ)で月3ドル。冷蔵庫やテレビなど、使用電力量が多い家庭は課金も大きくなる。農村部はまだ電気が通っていない地域が多い。
水道は、以前は無料だったが現在は有料。都市部では飲料水は買わないといけぬ。
生活費を切り詰めることはできても、東ティモールの文化として、慣習的な儀式や冠婚葬祭などが非常に大きな支出となる。
◆海外NGO団体の現地スタッフであるパウラの場合。子どもを含め家族8人が持ち家で生活している。夫は地方で医療関係の仕事をしていて別居しているが、毎月仕送りはある。彼女の収入が月に150~200ドル。毎月の支出合計は約155ドル。その内訳は、 ●電気代と水道代あわせて月約40ドル ●米は毎月約2袋(50キロ)消費=30ドル ●おかず代、毎月約60ドル。ただし、家庭菜園があるので、そこで育てたものも食べて家計の足しにしている。 ●下の子どもの私立の幼稚園(公立の幼稚園はまだない)の費用が月5ドル。 ●月20ドルの貯金を目標にしているが、冠婚葬祭などがあると、そうして貯めたお金があつという間になくなってしまふ。
◆路上やショッピングモールで、携帯電話のプリペイドカードを売る人たちの収入は、1日数ドル。タクシー運転手の場合は、1日に平均約40ドルの売り上げから20ドルを車の持ち主に、さらにガソリンを支払うと手元に残るのは1~2ドルだという。

**NGOの挑戦**  
2002年5月20日の独立以来、東ティモール全土に多くのNGOが生まれた。また、東ティモールで活動する国際NGOも多い。農業、人権、教育、環境、政策提言、調査……と、その活動は多岐にわたっている。

しかし最近、こうしたNGOの中で問題も生まれている。NGOで働きたいという多くの若者の動機が「東ティモール社会を変革したい」という精神ではなく、金銭的な理由、つまり公務員のような単なる職業としてNGOをとらえているからだ。国際機関や外資企業、政府などで働く足掛かりを得るために、NGOで「学ぶ」ことを目的としたキャリア志向の人もいる。東ティモールの教育システムは十分でなく、質も良いとは言えない。それが人材不足につながっている。それでも、市民社会が政策を監視する役割として、NGOは今後もますます重要な役割を果たさなければならないことは明らかだ。

また、海外の援助団体との関係にも問題がある。海外ドナーは、資金の使い道や財務システムについて、非常に厳格な条件を提示する。東ティモールのNGOの多くは、その条件に適合できる団体が少ないため、昨今では海外ドナー団体の多くは、東ティモールを離れ、別の地域・国への支援へと移行しつつあるため、海外資金に依存してきた東ティモール国内のNGOの活動存続そのものが問題になっている。独立後に誕生したNGOの多くは、プロジェクトの多くがプロジェクトの支援はするが、組織運営費や人件費は支援しないという条件が付く。しかもドナー団体の予算年度に合わせた支援金額とプロジェクト計画が決定されるため、現場では、地域の都合ではなくドナー団体の都合に合わせた対応をしなければならぬという問題が発生してきた。

とはいえ、昨今では海外ドナー団体の多くは、東ティモールを離れ、別の地域・国への支援へと移行しつつあるため、海外資金に依存してきた東ティモール国内のNGOの活動存続そのものが問題になっている。独立後に誕生したNGOの多くは、プロジェクトベースの海外資金に頼り切り、自分たちで資金調達することをしなかつたため、海外ドナーが減ってきた現在、活動休止もしくは存続の危機に直面している。

東ティモール政府にも、市民社会支援の資金源があり、それを活用するNGOもあるが、資金を得ることによってNGOの社会に対する役割、すなわち政府の開発計画などを、法律や民主主義から外れていないか、批判的に検証する市民的立場が弱まってしまうことが懸念される。

東ティモールは、確かに1999年に独立という自由を得て、2002年に主権を回復した。しかし、真の自由のために、そしてすべての東ティモールの人びとが貧困や飢えや栄養失調やそのほかの困難から抜け出し、よりよい未来を築けるために、今こそ、東ティモール人全員がこれまで以上に良い仕事をしなければならぬ。憲法と正義を尊重し、平和な未来を築き、民衆の生活を向上していく真の開発のために、しっかりと働くべき時がきているのだ。(翻訳・まとめ・野川未央)



地方の幹線道路。舗装されていないので雨季はこの通り。

ラ、コーヒーなのである。政府は夢を語るのには上手だ。しかし計画実行に民意が反映されることは少ない。

メガプロジェクトで収用される農地

石油基金を利用した巨大インフラ事業による土地収用も問題になっている。

また、ベタノでは230ヘクタールの工業油等の精製所建設が計画されている。さらにビケケからベタノを経由して、スアイまでの高速道路の建設計画がある。これらの計画で、自分たちが生まれ育った土地を手放すことを余儀なくされるだろう人びとが多数いる。そして地名さえも、ノバ(新し)ベタノ、ノバ・スアイと変えられるのだ。ベアスでは液化天然ガスプラント建設計画も浮上している。このメガプロジェクトは、生産性の高い農地を大規模に収用しないと実現できない。そうすると、地元農民の生活は大きく変わるはずだが、まだ詳しいことは政府から何も説明されていない。

弱い立場の人びとの側になった土地法の制定を

1999年の住民投票時、東ティモールの独立を拒むインドネシア軍の介入によって東ティモール全土で暴力事件が起こり、社会不安が募った。多くの人びとが家や土地を捨て、山や森の中に避難したり、インドネシア側に逃れたりした。また、各地方からデシリに移住した人も多く、逆に農村部で



道路脇に輸入米が積み上げられている光景も珍しくない。

は、空き家や放置された土地に新しく住み着いた人も多くいた。それ以来、土地・家屋の所有をめぐって、いざこざが絶えることはなかった。土地の所有権が明確になっていないためだ。

政府は一刻も早く、適正なシステムを作って、この土地の不正義に対応しなくてはいけなかつた。2007年10月、米国際開発局(USAID)は「私たちの土地(INR)」と名付けたプロジェクトを開始した。USAIDは、このプロジェクトのために農村開発連合(ARD)に対して資金を拠出し、共に運営を担当した。このプログラムは、土地を計測し、証書登録を発行し、個人、夫婦、グループ、組織、そして政府でも、権利をも

つた土地を開拓することができる。この土地法案は、2011年に国会で審議され承認されたが、翌2012年3月、当時のラモス・ホルタ大統領は、修正論議を行うよう法案を国会に差し戻した。ホルタ大統領によれば、同法案は零細農民や弱い立場の人びとが土地にアクセスする権利を守っていないこと。さらに、ポルトガルの植民地時代とインドネシアの占領時代に固定化された不正義なシステムを解決することができないから、というのがその理由だった。

国会に戻された土地法案は、司法省によって修正がかけられ、さらに地方で審議会が開かれ、NGOなど市民社会からの意見なども求められた。こうしたプロセスを経て、法案は修正され、再び国会に提出されたが、残念ながら、この修正法案についての審議はまだまだなされておらず、そのまま放置されている。こうした状況で今日何が起きているかというと、土地法がまだ通っていないにも関わらず、政府は継続して土地を収用し、大規模事業を計画通りに進めているのだ。

# 『ルック・オブ・サイレンス』が描く インドネシア社会の影

岩原紘伊／いわはら・ひろい  
早稲田大学アジア太平洋研究センター助手

**今** から50年前の1965年9月30日深夜、インドネシアの首都ジャカルタでスカルノ大統領親衛隊が陸軍の将軍を襲撃するというクーデター未遂事件が起こった。「9・30事件」と呼ばれるこの事件は、事件を収束させたスハルト少将(後の第二代大統領)によってインドネシア共産党(以後、PKI)により仕組まれた事件であると発表された。以後数年間に渡りインドネシア各地で、国軍に動員された反共産主義勢



主人公のアディ(左)、オッペンハイマー監督(右)。(2015年6月3日、早稲田大学にて)

力のみならず民間人の手によっても、100万人とも200万人ともいわれたPKI関係者や支持者とされる人びとが虐殺された。そのなかには日ごろの恨みを晴らすために「共産党員である」と濡れ衣を着せられた者、親族によって共産党員と通報された者も含まれていたとされる。この大虐殺は多くの人びとの心に深い傷を負わせ、現在もなおインドネシア社会に暗い影を落として続けている。

## 『ルック・オブ・サイレンス』が描き出すもの

『ルック・オブ・サイレンス』(2015年7月、日本公開)は、上記の大虐殺を被害者側から見つめ直したドキュメンタリー映画であり、今日まで罪悪感なく生きる加害者自らに虐殺の様子を演じさせることで「悪」とは何かを問いかけた『アクト・オブ・キリング』(2014年、日本公開)と対をなす作品である。本作の主人公は、大虐殺によって兄を殺

されたアディである。事件後加害者らは地域の権力者となったため、アディの家族は声を上げられず、半世紀もの間怯え苦しみながら生きてきた。その状況のなか、本作監督による加害者らへのインタビュー映像を見たアディは、殺された兄や家族のため加害者らに罪を認めさせたいと願い、監督に加害者と直接対峙することを申し出る。そして、本作では眼鏡技師として働くアディが「無料の視力診断」を名目に加害者らを訪ね、虐殺に関する質問を投げかけることで、現在も罪の意識なく生き続ける彼らの心理メカニズムのあり様が抉り出されていく(同映画パンフレットよりまとめ)。

## 『ルック・オブ・サイレンス』の受け止められ方

では、インドネシア社会はどのような本作を受け止めたのであろうか。本作は、2014年11月に、ジャカルタにある国内最大級の劇場でプレミア上映会が行われ、一目映画を見ようとす

い込まれる事態も発生した。また本作の主人公アディとその家族は身を守るため地元を離れる必要性に迫られた。これらの事実、被害者らが声を上げることが、現在もなおいかに危険性が高い行為なのかを如実に示している。行政組織の末端まで権威主義体制を張り巡らせていたスハルト政権が1998年に崩壊して以来、大虐殺の被害者家族らが組織する団体が、被害者の名誉回復や政府の謝罪を求める運動を少しずつ始めている。本作の公開は、このような運動の広がりを後押しし、いつの日か「共産党員は悪だ」という社会に流布する認識を刷新して、被害者家族の苦しみを和らげる可能性を高める役割を果たしたといえよう。

最後に、筆者の調査地であるバリ島でもこの時期に数万人が命を落としたといわれる。筆者の友人の父も大虐殺の被害者である。教師であった彼の父は、親族に「共産党支持者である」と通報され連れて行かれたきり戻らなかつたという。彼は、友人らを招いて私的に同映画の上映会や虐殺事件についての勉強会を開催している。一筋縄ではないかと思うが、悲劇を二度と繰り返さないために、彼の志がより多くの人びとに共感され広まっていくことを願ってやまない。■

# マウナケアとカプ・アロハ

西田純子／にしだ・じゅんこ  
日本ハワイ移民資料館カルチュラアドバイザー

**今** ハワイ島のマウナケア山の頂上に18階建てビルに相当する巨大望遠鏡施設30メートル望遠鏡(以下、TMI)が建てられようとしています。地下2階分ほど地面が掘られ、望遠鏡、化学物質を保管する地下タンク、その他施設を含め、合計約1万坪弱の土地が切り開かれるこのプロジェクトには、日本、米国、カナダ、中国、インドの5カ国が参加し、建設費総額1500億円のうち4分の1を日本が負担する計画です。

マウナケアは海洋底から測ると標高が世界で一番高く、別名マウナ・ア・ワケアとも呼ばれ、ハワイの創世神話に登場する「父なる空ワケアと母なる大地パハ・ハナウモクが生んだ山(こども)」とも伝えられています。ハワイの人びとにとって、いのちが始まったといわれる神聖な山です。マウナケアの頂上付近は「ヴァオ・アクア(神の領域)」と呼ばれ、その昔はごく限られたカフナ(神官)のみしか入ることができませんでした。現在は日本のスバル

を含め、11カ国13基の天文台が立ち並んでいます。

巨大望遠鏡施設TMTは、2009年にマウナケアの頂上付近での建設が決定されました。住民との十分な話し合いも行われぬまま、2014年10月に着工が行われ、2015年4月から工事が開始されました。半強引に進められたTMTの計画に対して、多くの人びとが声をあげました。声を上げた裏には、「これ以上は耐えきれない」という想いがあります。マウナケアはハワイアンにとっての祖先ともいえる大切な山です。また、ハワイ州によって「保護地区」に指定されたにも関わらず、過去30年の間、13基もの天文台が建設されたうえ、7度の水銀漏れといったような生態系に影響をあたえる事故が報告されました。また、新しく建設されるTMTの計画では、これまでの天文台施設の10倍以上という巨大な土地が切り開かれてしまいます。抗議運動はハワイ島に住む数人のハワイアンから始まりましたが、4



マウナケア山頂点(プウ・ヴェーキウ)。

若者の姿をみて、ハワイだけでなく、世界の多くの人びとが心を動かされました。

TMTの目的は、宇宙の始まりや他の惑星の生命体の在無などを調べるためとされていますが、TMTの軍事利用を懸念する声も聞きます。ハワイに残る言い伝えで、こんな話があります。「人間は皆同じ山に上る途中で、それぞれが違う道を通っている。それぞれ見る景色は違い、今日の景色と明日の景色もちがう。頂上に着いた時にやっど、世界のすべての景色を見渡すことができる。しかし、私たちのうち誰かが、頂上までたどり着いたのだろうか。私たちは皆まだ学びの途中です」。マウナケア山自体が宇宙の始まり、いのちの神秘を表している場所にも関わらず、まだたどり着いていない頂上の土地を削り、そこに巨大な施設を造るといった行為は、現代の私たちの状況をよく表しているかもしれません。結果を急ぎ、自分の心の声、いのちあるものの声が聞こえず、物事をバツと終わらせる。本当は、大事なことは自分の足元にあるのかもしれないのに。今マウナケアで起こっていることは、そんな私たちの在り方をもう一度考え直す時だというメッセージなのかもしれません。■

03

## コロサエの歌が聴こえる 06

Ego Lemosの世界

野川未央 / のがわ・みお  
APLA事務局

### DAME IHA TIMOR

標高1000m以上あるエルメラの村は、日が暮れると一気に冷え込んできます。台所で三角かまどの火を囲んで料理しながら、外で焚き火を囲みながら、おしゃべりはずみずみ。

先日の訪問の際は、エゴと一緒にいたこともあり、たわいもないおしゃべりから「豊かさって何だろう？」という話になっていきました。インドで沢山の農民が綿の種と農業のローンが返済できずに自殺に追い込まれていること、先進国と呼ばれる国の社会問題（日本の過労死や自殺、いじめの問題も）、そして東ティモール国内でも実際に起こっている国際援助機関や政府によるバラマキで地域が破壊されてしまった事例などなど。色んな地域や国に行ったことがあるエゴがユーモアも交えながら話におとなも子どももみんな釘付け。

最後には「お金はないかもしれないけど、ぼくたちは決して貧しくないんだよ。先祖から引き継いできた土地がある。山から水が流れ

Ita tenki haburas dame... iha Timor  
Hodi Hado'ok Ita  
Hosi susar mos oin oin ba o  
Atu nune Ita sei la terus tan Oh.. Oh.. Timor  
Atu nune Ita sei la tanis tan Oh.. Oh.. Timor  
Atu nune hodi moris ho dame oh.. oh.. Timor

焚き火を囲む。



てくる。食べものも自分たちで作れる。助け合える家族や仲間がいる。何よりもこうして火を囲んでゆったりおしゃべりできる平和と自由があるんだから!」と、エゴ。まったく同感です。

人の命や暮らしを食いものにしようとする強大な力がどんどん押し寄せてくるいま、どうやってこの「豊かさ」を守り、よりよい暮らし・地域をつくっていけるのか。平和な社会を子どもや孫たちの代まで手渡していけるのか。村のみんなの挑戦を応援しながら、わたし自身も学ばせてもらっています。

ティモールの平和を育てていかなければいけないよ  
君を苦痛や悲しみから遠ざけるために  
みんながこれ以上、苦しめないように  
みんながこれ以上、涙を流さないように  
みんなが仲良く暮らせるように (訳:野川未央)

04

## 美味しいマンガ 06

『戦争めし』

魚乃目三太(著)、  
ヤングチャンピオン・コミックス  
秋田書店(発売)

安藤丈将 / あんどう・たけまさ  
武蔵大学教員



人びとは懸命に「美味しく食べる」ことを追求します。非日常だからこ

「戦争めし」は、私たちが当たり前に食べているものが、いかに戦争に媒介されているのかを教えてください。戦争下の困難な条件のもとでも、

「これからも「美味しく食べる」ために」

この70年間、「美味しく食べる」ことを奪われたり、奪ったりしたくないという人びとの願いが、好戦的な政治家にブレイキをかけてきました。武器ではなく食べもので外国の人びとと交流し、その中で互いの「美味しい」を共有し合う。そんな未来を心に描きながら、連載を終わりにしたいと思います。

「戦争めし」は、私たちが当たり前に食べているものが、いかに戦争に媒介されているのかを教えてください。戦争下の困難な条件のもとでも、

「これからも「美味しく食べる」ために」

「これからも「美味しく食べる」ために」

01

## カカオ kakao kita

カカオ民衆交易奮闘記

12

津留歴史 / つる・あきこ  
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員



カカオ豆の売上げの一部を代理で貯金してもらう確認書類にサイン。

貯蓄プログラムには多くの村人が集まりました。ほとんどの人が初めての銀行口座開設で「何やら良くわからないけれど、テッキー

貯金通帳を持参でカカオ豆を売りに来る生産者がいるのは、世界広しいえども、バブアだけではいではないでしょうか? 「カカオキタ(わたしたちのカカオ)」は、カカオ豆買付け時に生産者の貯金通帳を預かり、町の銀行での入金を代行するというサービスを開始しています。カカオキタ代表のテッキーさんは、事業をはじめた当初から「バブア人は現金を手にしてもすぐに使ってしまうので手元に残らない。これでは意味がない。カカオを売って得たお金の一部を貯金するプログラムを並行して実施することが大事だ」と言っていました。

貯蓄プログラム開始!

貯蓄プログラムの説明会には多くの村人が集まりました。ほとんどの人が初めての銀行口座開設で「何やら良くわからないけれど、テッキー

貯蓄プログラムの説明会には多くの村人が集まりました。ほとんどの人が初めての銀行口座開設で「何やら良くわからないけれど、テッキー

貯蓄プログラムの説明会には多くの村人が集まりました。ほとんどの人が初めての銀行口座開設で「何やら良くわからないけれど、テッキー

貯蓄プログラムの説明会には多くの村人が集まりました。ほとんどの人が初めての銀行口座開設で「何やら良くわからないけれど、テッキー

02

## マニラ・ジープニー通勤 6

小川二美子 / おがわ・ふみこ  
マニラ在住、会社員

### 大雨の日の帰宅

雨季が始まって、大雨が降るようになりました。大雨は1時間くらいで止みますが、降る時間帯が問題です。夕方4時~5時までに降ったら最悪。ほとんどの人は建物の軒先で雨宿りして、小雨になると一斉に道路に飛び出してジープニーに乗ろうとします。しかもジープニーは、路線のあちこちで冠水するため、スムーズに巡回できないので、運行数がとても少なくなります。

先週も最悪の時間帯に大雨が降りました。同僚のジェーンは夕方6時前に会社を出たのに帰宅したのは9時過ぎだったとか。私はラッキーなことに長時間待たずにジープニーに乗ることができました。ただしジープニーが巡回するUターン地点まで歩き、他の客が降りる瞬間を捉えて乗り込むのです。もちろん同じ考えの人はたくさんいますから早い者勝ちです。私はおばさんですが、けっこう動作が速いので、競えば勝ちます。

あつという間にジープニーは満席になり、何人ものサベット(ジープニーの後ろにぶら下がり乗り)もいます。ドライバーは、それ以上のサベットが出ないように行き先表示のボードを

外してしまいます。それでもジープニーに乗りたい人は必死にぶら下がってきます。ドライバーは無愛想に首を振りながら、エドサ大通りを北上しますが、道の半分はジープニーを探す人びとで埋め尽くされているので、スピードは出せません。ジープニーを探すみんなの目はまるで皿のよう。マイカー通勤の同僚は、「4車線の道路なのに2車線まで人がはみだして、ものすごい渋滞だったよ。人間も取り締まるべきなんだよ」と怒鳴

っています。それはそうなんだけれど……。どんだ道中央にはみだしていくマイカーとは縁のない群集の気持ちのほう、理解できちゃうんですね。



# APLA 食堂

Kitchen APLA

10

今日の食材 **エコシュリンプ**

レポーター **大久保ふみ** / おおくほ・ふみ  
APLA事務局  
**廣瀬康代** / ひろせ・やすよ  
APLA理事

## 炊飯器で作る簡単エビピラフ

人参のジュースで炊いたお米はカラーの写真が載せられないのが残念なほど鮮やかなオレンジ色に。炊飯器に具材を入れて炊き込むだけなので楽チンです。

### 【材料(2~3人分)】

- 米..... 2合
- エコシュリンプ むき身S..... 100~200g
- まるごとジュース(二本松有機農業研究会の人参ジュース)
- 塩..... 少々
- 白ワイン..... 少々
- パレスチナのオリーブオイル..... 適宜

### 【作り方】

1. 自然解凍しておいたエコシュリンプを塩水で洗い、水を切って背に切り込みを入れ、白ワインに漬けておく。
2. 炊飯器に洗ったお米と人参ジュースを入れ、2合のお米を炊く時より少なめの水加減にする。塩を加えてかきまぜ、ワインの水分を切ったエビをお米の上に並べる。
3. オリーブオイルを一まわし入れてから炊く。炊き上がったエコシュリンプを混ぜて、お好みでオリーブオイルをかける。飾りにイタリアンパセリをのせると彩りがさらに良くなる。

### 〈ポイント〉

炊飯前にオイルを入れることで、お米同士がくっつきにくくパラっとしやすくなります。

### スタッフからお知らせ

今回で10回目を迎えたAPLA食堂ですが、次号から内容を一新し、新しいコーナーになります。民衆交際品をもっと手軽に使ってもらいたい!と始まったこのコーナー。「誰でも簡単に作れること」をモットーに、3ステップで完成するようなレシピを中心に載せてきました。どれくらいの方が見てくれているのか不安な面もありましたが、反響や感

想をいただき嬉しいことも沢山ありました。ありがとうございました。写真撮影と称した料理の試食会ができなくなるのはとても残念ですが、次号からもどうぞお楽しみに! そんな次号の気になる内容ですが……知る人ぞ知る!? あのシェフをお迎えして、お送りしていきます。



## エコシュリンプを使った 彩りある食卓で 心もホカホカ♪

## 豆腐のエビあんかけ

### 【材料(2~3人分)】

- 豆腐..... 1丁
- エコシュリンプ..... 100g
- 酒..... 大さじ2
- エノキ..... 1束
- 水溶き片栗粉..... 大さじ2
- 小ネギ又はカイワレ..... 少々

### 〈煮汁〉

- だし汁..... 1と2/3カップ
- 酒..... 1/3カップ
- みりん..... 大さじ1
- 薄口しょうゆ..... 大さじ1
- 塩..... 少々

### 【作り方】

1. エノキはいしづきを切り落とし、半分にする。豆腐は軽く水を切り、大きめのさいの目状に切っておく。
2. 自然解凍しておいたエコシュリンプは洗って水を切り、ぶつ切りにしてから酒を加えてほぐしておく。
3. 鍋で沸騰させた煮汁にエノキを入れて、煮立ったらエコシュリンプを酒ごと加える。豆腐も加え、エコシュリンプに火が通ったら、水溶き片栗粉でとろみをつける。器に盛り小口切りにした小ネギかカイワレを散らす。

### 〈ポイント〉

エコシュリンプは1袋が200gなので、それぞれのレシピで100gずつ使えば1袋使いきりでちょうど2品作れます。

想をいただき嬉しいことも沢山ありました。ありがとうございました。写真撮影と称した料理の試食会ができなくなるのはとても残念ですが、次号からもどうぞお楽しみに! そんな次号の気になる内容ですが……知る人ぞ知る!? あのシェフをお迎えして、お送りしていきます。

自慢する人 **星川美穂** / ほしかわ・みほ

# 毎

年3月の終わり、山口県上関町の祝島へひじきがり体験に訪れます。通い始めて6年、春を感じる恒例行事となりました。祝島のひじきや農業を使わずに育てたびわの葉茶の加工・販売をしている「祝島市場」の代表である山戸孝さんの案内で、干潮の海でひじきを手採りします。採ってからすぐに鉄釜で5時間ほどじっくりと炊きあげます。2週間ほど天日干したらできあがり。祝島のひじきは驚くほど柔らかく、海の香りとうまみがつまっています。祝島に興味をもったきっかけは、上関原子力発電所の建設予定地が



ひじきがり体験の様子。



ひじきを持つ山戸孝さん。



大きな鉄釜で祝島の薪をつかって炊き上げる。

# わたしの 友産友消 しまん

06

## 祝島ひじきの巻

あり島民が30年以上にわたり反対し続けている点でした。しかし、いま祝島に通い続ける理由はこの島に恋してしまったからだと考えています。海も山も人も豊かで、猫ものんびり暮らすこの島がとても好きで、ずっとあり続けてほしいと願っています。原発に頼ることなく島が自立し持続していくために、島外の人間として何ができるのか。祝島のひじきを食べて、つながることも

ひとつの方法です。島の時間や暮らしを守りながら訪問し、共に未来について考える時間をつくることもまたひとつの方法だと考えています。



豊かな海がひろがる祝島。

### 祝島市場

山口県熊毛郡上関町祝島168-1 《電話・FAX》0820-66-2538  
《Website》<http://www5d.biglobe.ne.jp/~jf-iwai/>

編集後記

今号の特集に、農場現場で苦闘するマリ  
アノさんが直筆の原稿を送ってくれた。主権  
回復から13年。東ティモールの人びとの生  
活はどのように変わったのか、すさまじい犠  
牲を経て得た主権は、本当に回復したのか  
……。編集部からの盛り沢山の注文に真摯  
に応え、メディアでは全く知ることのできな  
い東ティモールの現状を明晰に分析してく  
れた。今後も「ハリーナ」はアジア現地から  
の生の声を多角的に紹介する誌面を創って  
いきたいと思う。

また、6回の連載で楽しく賑やかな誌面を  
作ってくれた、安藤丈将さんの「美味しいマ  
ンガ」、小川二美子さんの「マニラ・ジープニー  
通勤」、野川未央さんの「ロロサエの歌が聴こ  
える」が今号で最終回。次号に向けて新コラ  
ムを企画中ですので、乞うご期待！（大橋）

いつか必ず訪れたい場所がまた一つ増え  
た。それは韓国・済州島の江汀村。前号の「ハ  
リーナ」で紹介された映画「クロンヒ、風が吹  
く」の舞台だ。9月の連休を使って足を運ん  
だ沖縄・辺野古で、江汀からの友人たちと出  
会った。キャンプシュワブのゲート前でその  
うちの一人が沖縄県警によって不当逮捕さ  
れるという許しがたい事態をのぞけば、素晴  
らしい出会いだった。その友人の中に、以前  
東ティモールで一年ほど暮らしたことがある  
という同年代の女性がいた。東アジアの異な  
る国で生まれ育った私たちが、沖縄で出会い、  
東ティモールの公用語であるテトゥン語で  
おしゃべりをし、そして、この世界の平和を  
祈った。（野川）

# ハリーナ HALINA

2015年11月号 vol.02-no.30  
2015年11月1日発行

【編集長】  
大橋成子

【編集者】  
野川未央

【表紙写真】  
長倉徳生

【デザイン・制作】  
十年舎

【編集・発行】  
特定非営利活動法人 APLA  
(APLA/あぷら: Alternative Peoples Linkage in Asia)  
〒169-0072  
東京都新宿区大久保2-4-15  
サンライズ新宿3F  
tel. 03-5273-8160  
fax. 03-5273-8667  
e-mail info@apla.jp  
URL http://www.apla.jp

【印刷】  
株式会社セイズ

事務局の動き(2015年8月～10月)	
8月 1日	草の根市民基金・ぐらんの交流会に寺田が参加しました。
8月 9日	東京朝市・アースティマーケットに“P to P Café”として出店しました。
8月 20日～ 21日	BMW技術基礎セミナーに寺田が参加しました。
8月 26日	ハルシステム埼玉・平和フェスタに参加しました。
8月 26日	「辺野古・高江を守ろう！NGOネットワーク」設立集会に秋山が参加しました。
8月 26日～ 9月 6日	東ティモールとインドネシアに野川が出張しました。
9月 1日	東京経済大学のネグロスツアー事前学習会で寺田が講義しました。
9月 12日	第三回ロータス寺市に出店しました。
9月 15日	カカオクッキー waの打ち合わせのため、福島県福島市の特定非営利活動法人シャロームを大久保が訪問しました。
9月 15日～ 26日	フィリピン・ネグロス島に寺田が出張しました。
9月 26日、 27日	東京朝市・アースティマーケットに“P to P Café”として出店しました。
9月 28日	ハルシステム東京・食と緑の委員会でバランスバナナについての講習会講師をつとめました。
10月 2日	ハルシステム埼玉・川越地区会でコーヒー講習会講師をつとめました。
10月 3日	理事会・評議員会を開催しました。
10月 12日	アーユス仏教国際協力ネットワーク、ニュー・インターナショナルリスト・ジャパンとの共催で「おいしいコー ヒー入門講座@清澄白河～フェアトレードコーヒーの魅力を探る～」を開催しました。
10月 16日	ハルシステム東京・武蔵野委員会でコーヒー講習会講師をつとめました。
10月 17日	ハルシステム東京・桜委員会でピースカフェ (APLAの活動について) 講師をつとめました。
10月 19日	グリーンコープ共同体的 fromネグロス学習会で野川が話をしました。
10月 25日	東京朝市・アースティマーケットに“P to P Café”として出店しました。

## 事務局からお知らせ

- 以下の呼びかけに賛同・参加しました。**
- 安全保障法制に反対する NGO国際共同声明  
※ Kaneshige Farm Rural Campus(KF-RC)、Konservasi Indonesia(KOIN)、Yayasan Pengembangan Masyarakat Desa Papua(YPMD)、Pematil(Permaculture Timor Lorosa'e)、KSI(Kdalak Sulimutuk Institute)、Peace Centre of Universidade Nasional Timor-Lorosaeなど、APLAの海外のパートナー団体からも賛同の声が届きました。
  - 共同声明「翁長沖縄県知事の辺野古埋め立て承認取り消しを支持～政府は沖縄の民意を受け止めるべき～」

**「福島の子どもたちに届けよう バナナ募金」へご協力を！**  
20施設、約1400人の子どもたちへバナナの発送を継続してきていますが、募金額が減少してきております。皆様のご支援・ご協力、よろしくお願いいたします。

**2015年度のキャンペーンニュースが完成しました！**  
アジア各地の仲間たちの取り組みを後押しするために、周りの方にAPLAの活動を説明するのにご活用いただければ幸いです。まとめてご入用の方は事務局までご連絡ください。



## テンペの作り方

- 1 まずは大豆を選別。
- 2 一晩浸水させた大豆を茹でる。
- 3 茹であがった大豆から、薄皮を取り除く。
- 4 市販のテンペ菌を振りかけ、まんべんなく混ぜ合わせる。
- 5 発酵させるためにバナナの葉やプラスチック袋で包装。
- 6 上手く発酵するかな!?

みなさんは、テンペというものを食べたことありますか？大豆を発酵させた食品で、元々インドネシアではとっても庶民的な食べ物です。東ティモールでも、このテンペとタフ（豆腐）は日常的に食べられています。いちばで買うのが当たり前。作り方を知ってい

る人はあまりいません。村では、お肉はハレの日や特別な来客があった時にしか食べられない貴重なもの。淡水魚の養殖も地域内で始めていますが、それと合わせて、テンペを自分たちで作れるようになることで、子どもたちのたんぱく質不足を補い、市場での支出を減らすことができれば！と、コーヒー生産者グループの女性たちがテンペ作りに挑戦することになり

ました。先生は、テンペ作りの経験があるATITスタッフのパウラさん。別のグループからも代表者が参加し、一緒にテンペの作り方を学ぶ機会を得ることになりました。

い。男性の手伝いだけではなく、自分たちで収入を生み出すための一歩を踏み出したことを誇りに思っています。まずは、子どもたち・自分たちが食べられるようにテンペを作っていくたいし、いずれは販売したいです」という意気込みを伝えてくれました。それに対して、先生をつとめたパウラさんからは「今日も何種類かのやり方を試してみただけれど、自分たちで工夫・

研究することが大切で、これが正解！ということはありません。もし今日つくったすべてが失敗してしまったとしても、あきらめずにグループで挑戦してほしい」と激励。別のグループから参加した4人の女性も真剣にメモをとりながら作業に加わり、「地域に戻って習ったことを他のメンバーにも共有します」と嬉しそうでした。

そのワークショップから約4カ月。グループでは、何度か失敗を重ねながらも作り方をすっかりマスターして、メンバーで集まって作ったテンペを何度かいちばに売りに行っているそう。前述のフラビアさんに聞いてみたところ「4つで1ドルで販売しています。自分たちで栽培した大豆が底をついてしまったので、たまにいちばで買った大豆で作ったりもするけれど、また大豆を沢山植えて来年はもっと沢山テンペを作ろうと思っ